

立命館大学校友会 福島支援ツアー 1泊2日を終えて 「現地を訪問して想うこと」

氏名 田中 悟 卒業年 1981年 卒業学部 理工学部

研修旅行を終えて1カ月が経過したころ、ふと新聞に目をやるとある記事が目にとまった。「福島 飯館村民の半数、原発賠償増申し立て」という見出しの新聞記事(2014年11月15日 土曜日)である。飯館村と言えば地図で確認すると、福島第1原発から北北西に30kmの位置であり今回のツアーで訪れた川内村からも数十キロのところであることから、その風景は川内村と同じような平和でのどかな地域であることが予想される。

東京電力福島第1原発事故で、全域が避難指示区域に指定された福島県飯館村の村民のうち約半数に当たる2800人余りがこのほど、現行の慰謝料では生活再建が無理として、裁判外紛争解決手続き(ADR)機関の原子力損害賠償紛争センターに増額などを求めて仲介申し立てを行った。申し立てを行ったのは737世帯の計2837人。ほとんどの人の自宅が、居住制限区域か避難指示解除準備区域に指定されているという。

村民らは申し立てで、現行の慰謝料1人月10万円の同35万円への増額に加え、被ばくへの不安に対する慰謝料(1人300万円)と生活を破壊されたことへの慰謝料(同200万円)などを東電に求めた。東京都内で記者会見した村民救済申し立て団の長谷川健一団長(61歳)は「村民はじっと我慢してきたが何も進展しない。怒っているという意思表示をしないと駄目だと思った」と話したという。長谷川健一さんと言えば後にも書いた七つ森書房から出版されている「まいで村、飯館」の著者で酪農家である方である。

また同じ日の新聞報道でも避難している浪江町津島地区の住民も二本松市の男女共生センターで「原発事故の完全賠償を求める会」の設立総会を開催し、総会には津島地区の住民約200人が参加して、国や東電に訴訟や裁判外紛争解決手続き(ADR)申し立てを起こすなどを確認したと報道されている。

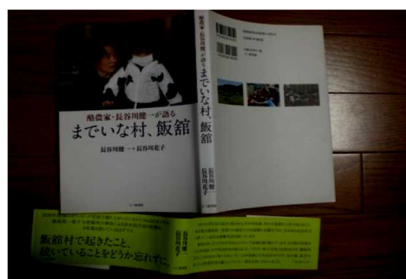
あの事故があってから、すでに3年9ヵ月が経とうとしている今日、被災された方々の生活は限界にきているといっても過言ではない気がする。いまだに「見えないもの(放射能、風評被害)との闘いが続いている」ことに怒りと驚きを感じています。

私は30年間の教員生活を早期退職して、現在は、障害者に働く場と生きがいを与え続けきた社会福祉法人「亀岡福祉会 かめおか作業所」に勤務させていただいております。そこで今回の事故で障害のある方の命が奪われた数は、障害のない人の実に2倍以上の1658人に及んでいるということを知りました。これも関係者の足で調査して明らかになった数字であるそうです。また、私の勤務する「かめおか作業所」では若い職員の方が、事故が発生したことを受けて、現地までボランティアの活動に駆け付けたことを聞きました。何と行動が的確で迅速であることか。事故のあった日は私が以前に勤務していた学校は卒

業式が行われた日であり、その時間帯は卒業式を終え、次の学年の編成を考える大切な学年会の時間帯でありました。遠く離れた京都の南丹市でも長い時間にわたる不気味な「揺れ」に襲わたのです。その後、校長室にあるテレビで仙台空港を津波が襲う様子や町を丸ごと飲み込んでしまう映像を目のあたりにしてこれが現実の世界でおこっていることか驚愕したのを思い出します。その日の夜は卒業生を送り出した学年の先生方を慰労する宴席が用意されていたが先生方には申し訳なかったが参加できない・・・との電話を入れることにしました。また翌日には私が顧問をしていた野球部の練習試合を組んでいた日で「野球なんぞ、している場合ではない！」と相手の学校の先生に丁寧にお断りの電話を入れ、野球部員、一人一人にも事情を説明し野球部にとってはシーズン前の大切な練習であったがそれを見送ったことを思い出します。「何かしなければ・・・」「自分にできることがあれば・・・」という思いがあったわけですが、行動に移す余裕と時間がなく悔しい思いをしました。その当時、教員の世界でも支援しようという動きがあり、生徒自ら考えて、生徒会活動で「募金活動」をしたり、学校を代表でして管理職の先生が支援に行っていたとということがありました。当時、教頭であった先生が教育委員会からの依頼で派遣され1週間ほど学習支援という形で宮城県に派遣され学校を留守にしました。

先ほどの新聞記事に出てきた大館村のことについて少し述べてみたいと思います。1泊2日の研修が終わりましたが私は郡山の町をもっと知りたいと思い、あと1泊することにしました。レンタカーを借りて車を走らせて、福島空港に向かう途中の大型店舗の本屋さん立ち寄りしてみました。というのはこの旅行に参加する前に本でも読んで学習しようと思い勤務を終えて本屋さんへ寄りついたら私の勤務地である亀岡には震災関係の書籍がもうほとんど置いてない状況があり、学習できないまま今回の応援ツアーに参加したという後ろめたいような思いがしたからでした。その本屋さんで購入することにして、6冊ほどのまとめ買いをしたのです。

購入した本





その中の1冊で、酪農家・長谷川健一が語る「までいな村、飯館」（七つ森書房）という本がありました。

その背表紙には

【2,020年開催のオリンピック招致で盛り上がっているかにみえる日本ですが、福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染の影響は6年後も続いているはずで、飯館村で起きたこと、続いていることをどうか忘れずに。

2011年3月11日に起きた東日本太平洋沖地震、あの地震から3年が経ちました。東京電力福島第一原発での事故で全村避難を余儀なくされ、私自身も仮設住宅に移って、いまなお避難生活が続いています。

事故以来、どこにでもカメラを持って行って記録を撮り続けています。その数は写真が1万点を越え、ビデオも300本を越えました。つたない素人写真ではありますが、飯館村民として皆さんに知ってもらいたいことことを凝縮した作品ばかりです。私の妻、長谷川花子にも仮設住宅の暮らしについて一章を分担してもらいました。]

「はじめに」より

4世代家族で、家族で力を合わせて牛を増やしてきたこと、息子さんが後継ぎとして酪農家として立派に成長してきたこと、そして村の中心となりその地域の中心として活動されてきたこと、被災された後牛乳工場や牛乳そのものが汚染され泣く泣く牛を処分してきたこと、避難バスに乗って全村避難を余儀なくされたこと、そして行政と闘いながら、徹底

的に除染を進めてきたことが書かれています。

奥さんも仮設住宅の管理人を引き受け、仮設住宅での活動の中心となって地域のまとまりが崩れないように、細かい点まで配慮しながら仮設暮らしの中でも、野菜作りやチューリップを育て、仮設暮らしに潤いを与え、潤滑油としてのはたらきをされてきたようです。

伊丹空港からの帰りの電車やバスの中で、川内村の村長さんの話を頭に思い浮かべて、帰路につきました。

わずか1泊2日のあっという間の短い研修旅行でしたが、こんなに中身の濃い充実した時間を与えていただいた立命館大学の校友会の皆さん、福島県人会の皆さんに感謝します。どうもありがとうございました。